

(続紙 1)

京都大 学	博士 (人間・環境学)	氏 名	末富 浩
論文題 目	エドモンド・バークの政治思想——『自然社会の擁護』および『崇高と美の観念の起源についての哲学的探求』を中心に——		
(論文内容の要旨)			
<p>イギリスの政治家、政治思想家であったエドモンド・バークは、アメリカ独立革命を支持する論陣を張ったかと思えばフランス革命に対してはその非道を手厳しく批判するというように、和解しがたい両面性をもつ人として知られる。その彼が若き日に書いた2冊の書物、すなわち『自然社会の擁護』と『崇高と美の起源についての哲学的探求』(以下、『崇高と美』と略記)には彼の後年の政治的著作を思わせるものはほとんどなく、ここにもまたバークのもつ不可解な多面性が表れている。本学位申請論文はバークの前期と後期の著作の間に広がる溝を埋め、1つの統一的なバーク像を描き出そうとする試みである。論文は全部で5章から成り、ケインズとバークの関係を論じた付論が付けられている。</p> <p>まず第1章において、自由主義者バークあるいは日和見主義・機会主義者バークというこれまでのバーク像とは全く異なるバーク像を描いて見せたP. J. スタンリスのバーク解釈なかならずく自然権をめぐる解釈を出発点とし、そこからL. スティーブンとJ. G. A. ポーコックのバーク解釈へと歩が進められる。抽象的・超越的理念を政治の場に持ち込むことを批判したバークであったが、彼は自然権(自然法)を丸ごと忌避しようとしたわけではない。自然法思想には古典古代のものと近代的との2つがあり、バークは古典的自然法思想までも排除しようとしたわけではない。このように考えてスタンリスはバークにおける功利と規範の融和を図ろうとするのであるが、本論文の指摘するところによれば、スタンリスは規範を現実の状況に即して適用する政治的行為を視野の外に置いている。原理・原則を現実の場面に演繹的に適用する原理主義とも、無理・無則の機会主義とも違う「便宜」の思想——スティーブンがバークに見たのはこのような「便宜」主義である。一方、ポーコックは歴史の具体的文脈の中で原理がどのようなかたちで法に体化されるかを考え、歴史の過程で生成する規範という観点からバークにおける原理の問題を考察した。このようにして本章では、3人のバーク解釈を通じて、バーク政治理論と超越的原理とが水と油の関係ではないことが示される。</p> <p>第2章ではバークの政治思想が西洋政治思想史の文脈に置かれる。そもそもバークには政治思想なるものが存在するのか、あるとすればどのようなものか。バークの政治的言説にはその時その時の状況論的言説が多く、一貫した政治思想がないように見える。しかし申請者によれば、バークの政治論は状況論に尽きるものではない。一貫性を欠くように見える彼の言説が脈絡を得るのは、自然法の「自然」、人間の自然の「自然」、すなわち自然そのものにスポットライトを当てたときである。このような観点から自然をめぐる西洋政治思想史がホブズを中心にして通覧され、自然と作為の分裂・緊張が生みだす近代政治社会の構造的危機に対峙するバークの姿が浮き彫りにされる。</p> <p>第3章は起承転結でいえば転にあたる章で、ここでは初期の著作の1つ、『自然社会の擁護』が考察の対象になる。近代政治社会を襲った構造的危機は神な</p>			

き世界を生み、人間社会も人為の所産だとする社会観に道を開いた。ボリングブルックの遺書に仮託して書かれた『自然社会の擁護』は、理神論、自然宗教の立場から人為を排し、ありのままの人間社会を良しとする「自然社会の擁護」へのパロディーである。バークはボリングブルックの自然社会論に一定の理解を示しつつも、彼が、世界の創造者は「彼のコップにたくさんの自然的害悪を混ぜた」という事実から目を逸らしていることをあげつらう。予想されるように、この認識はバーク政治論の出発点に立つものである。政治が生まれるのは「たくさんの自然的害悪」が存在するからであり、この害悪を解消するために政治的権力や議会が存在する。しかし権力が暴力に堕さず、議会が数の力に支配されないためには力を超えた何ものかが必要になる。このような認識がバークの政治論・政治思想に直結することは最初の2章で論じたことから明かである。

第4章ではもう1つの著作、『崇高と美』がバークの政治思想に位置づけられる。『自然社会の擁護』がボリングブルック流の自然主義に対するパロディーとして書かれたものであるとしたら、『崇高と美』は、バーク自身の自然主義を展開したものである。美の起源を超越的なアイデアに求めたプラトン流のアイデア説に対し、シャフツベリやハチソンは美が人間の感覚に由来するという感覚説をとった。しかしこの場合、美が個人個人の感覚に分裂してしまう恐れがある。このような隘路を打開するために、彼らは人間には利他心あるいは秩序を愛する感覚が先天的に内在していると考えた。これに対しバークはシャフツベリからハチソンへと受け継がれた道徳感覚説を内面的に批判し、美的能力＝趣味は感覚、想像力、判断力の総体であり、しかもそれは先天的に付与されているのではなく陶冶によって形成されると論じて、素朴な自然主義を克服しようとした。このようなバークの美学が神なき世界における人間と人間社会の成立可能性を問うた彼の政治思想と親縁性をもつことを本章は明らかにした。

処女作『自然社会の擁護』から『崇高と美』を経て後期の『フランス革命についての省察』に至るバークの多彩な著作に統一的な解釈を与えた後、最後の「終章」ではバークの言論活動を貫く思考の型が呈示されている。人間の秩序はもはや神の意志が差配する秩序ではないし、さりとして人間の自然がそのまま人間の秩序を形成するのでもない。神なき世界における近代の人間はいわば宙吊りにされた不安定な存在である。このような人間にとって社会はいかにして可能になるか。バークの思考を通底するのは神あるいは人間の自然を陰画としてもつ自然主義であり、社会を可能にするのは自然のこのネガの部分である。このように結論づけて、論文は閉じられる。

なお、ケインズとバークの関係を論じた付論はそれ自体として興味深いものであるが、本論とは直接の関係をもたないので、説明は省略することにする。

(論文審査の結果の要旨)

光を当てる角度が少し違ふと浮かび上がる相貌は大きく変化し、時代背景が変わるとその評価は180度転換する。19世紀のヴィクトリア朝時代には、バークは自由主義的な議会制民主主義の生成発展に寄与した先達として祭り上げられ、第一次世界大戦後の激動の戦間期には、権力闘争が繰り広げられる政治世界で権謀術数を駆使する日和見主義者・機会主義者へと姿を変え、そして第二次世界大戦後、東西冷戦が激しさを増すと、フランス革命を批判するバークは Kommunismus を批判するバーク、保守主義者バークへと変身する。政治家、政治思想家としてのバークをとっただけでもこうであるから、自然社会を論じ美学をも論じるバークとなると、ほとんど収拾がつかなくなる。われわれはバラバラなジグゾーパズルの断片を前にして途方に暮れるのみである。

本学位申請論文は膨大なジグゾーパズルの断片を組み直し、その一つ一つを収めるべきところに収め、そして統一的なバーク像を描こうとする試みである。

この困難な作業を進める第一歩として、申請者はバークが自然法についてのどのような考えをもっていたかを論じる。もしもバークが単なる保守主義者にすぎないとしたら、彼は自然法を他の抽象的原理ともども否定し去ったはずである。スタンリスのバーク解釈、バークは自然法を丸ごと否定したわけではないという解釈を手がかりに、ステューブン、ポーコックへと歩を進めたのは卓見であった。なにがしかの自然の法がなければ、政治社会は利害の衝突と均衡の場でしかなくなる。しかしまたその自然の法が天の彼方にある規範だとしたら、人間は規範の操り人形に貶められてしまう。自然の法があるとすれば、それは超越的な法ではなく、人間社会に内在する法でなければならない。ステューブんとポーコックのバーク解釈を読み込むことによって、申請者はバーク政治思想における自然法をそのあるべき位置に収めるのである。

しかし自然法という規範の位置を論じるだけであれば、バーク解釈は既存の解釈の解説に終わってしまうだろう。本論文はここから進んで、自然法の「自然」へと考察の歩を進める。自然そのものを論じることにより、視野が一挙に広がり、バークの政治思想を西洋政治思想史の脈絡に置くことが可能になる。政治家バークとしてなら「自然」を問う必要はなく、政治社会を既定の与件として言論活動を行えばよい。保守主義者、機会主義者、自由主義者といった類型は政治家バークの諸側面にほかならない。しかし政治思想家としてのバークは自然を問うことによって、政治社会の存立条件を問う。

中世から近代への移行は神の秩序に包摂されていた人間・社会の秩序から神が剥ぎ取られていく過程である。この過程で世界は神の支配する秩序から神の作った作品へと変化し、神の作品を動かした理解する能力＝理性が人間に付与される。だがさらにこの理性を人間から追い出したらどうなるか。理神論の啓蒙主義に対してバークが突きつけたのはこのような問いであり、この問いにおいて提起されたのは神なき世界での政治社会がいかにして可能かということであった。

このようにバークの問題を設定することによって、バークの西洋政治思想史における位置が明確になる。ホップズら彼の先行者たちの考える自然は動

物状態としての自然と神の恩寵下にある自然という二層構造をもつ自然であった。この自然の二層構造は引き裂かれた二層構造ではない。たとえばホッブズの社会契約を見れば分かるように、動物的自然（万人の万人に対する戦争状態）は神的自然（契約を行うように仕向けるのは人間理性）に回収されるループをもっている。これに対しバークの自然はその中間にある人間状態としての自然、すなわち人間本性（human nature）としての自然、いわば2つの自然のあいだで宙吊りになった自然である。人間は自己保存にのみ汲々とする存在ではないが、かといって自己の中に全体の調和をもたらす理性を宿した存在でもない。だから政治社会にいやしくも秩序があるとすれば、その契機は人間の外部、といっても神にまで飛翔しない外部、に求めなければならない。スタンリスの自然法やポーコックの歴史がまさしくそれであった。

このように本論文はバークの政治思想を政治社会の成立条件にまでさかのぼって考究し、バークの著作はもちろん、西洋政治思想史、宗教史、哲学史に関する膨大な文献を読み込んで、バークの核心に迫ろうとする。これだけをとっても本論文の意義は大なるものがある。しかし論文の目的はそれ以上に、一見すると政治思想とは無縁に見える初期の2著作、『自然社会の擁護』と『崇高と美』を、政治思想家バークの全体像の中に収めることにある。

なるほど『自然社会の擁護』および『崇高と美』については、それぞれ単独には研究の蓄積があり、またこれらの作品とバーク政治思想との関連を論じた研究もなくはない。しかし本論文は、そうした先行研究をふまえた上でさらに先を行き、「自然」という観念を手がかりとしてバークの全著作に通底するバーク特有の「思考の型」を抽出しようとした。つかみどころのないバーク像がここに至って明確な輪郭をもち始め、たとえ完全ではないにせよ、嵌め絵の断片が収まるべきところに収まった感がある。

鬱蒼とした藪の中を手探りで進まざるをえないために、記述が晦渋に陥るところも多々ある。しかし全体としてみれば論旨は明快であり、論文の意図は十分に伝わってくる。バーク政治思想のこれまで十分に解明されてこなかった側面に光を当て、バーク研究を一步前に進めたことは大きな貢献といわなければならない。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成23年12月22日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降